

三俣山～ラストハレオトコ～

【報告者】T口（1日目）、Y口（2日目）

【日時】2018年8月25日～26日 【天候】25日）晴れ時々曇り、26日）晴れ

【参加者】CL）I藤、Y口、T口

《コースタイム》

<1日目>

長者原〔8:28〕－指山自然観察路分岐駐車場〔8:52〕－採石道路分岐〔9:48〕－諏蛾守越〔10:03〕
－三俣山西峰〔10:35〕－諏蛾守越〔11:08〕－諏蛾守越分岐〔11:18〕－法華院温泉山荘〔11:58〕－
坊ガツル〔12:56〕～坊ガツルキャンプ場にてツェルト設営の臨時講習会～（この後山口さんと分流）
－ハローグッバイの丘〔13:57〕－雨ヶ池越〔14:08〕－長者原〔15:35〕

<2日目>

0750 坊がつの発～0845 北千里浜～1040 中岳～1230 諏蛾守越～1320 長者原駐車場着

《 報 告 》

【8月25日】（田口記）

台風19、20号が立て続けに来た週末、悪天候を心配しながらも予想に反して雨は降りませんでした。勢いのある風に乗って雲がどんどん流され、雨女の気がある私（T口）ですが、晴れ男のY口さんに吹き飛ばしてもらったのかなと思うほどでした。お陰様で気持ちの良い山行となりました。また、I藤さんには前回の天狗岳同様、計画から当日のCL、美味しい昼食まで！本当に今回もお世話になりました。

さて、前回に続き再びくじゅうのお山に登った訳ですが、同じ地域でこんなにも違うものかと、地形や景色に驚かされたルートでした。長者原からヤブの細道をかき分けて見えたのは硫黄山。黄色い斜面から煙がもうもう吹き出る様子に、思わずロード・オブ・ザ・リングの気分…。小人のフロドが火山に魔の指輪を捨てにいく物語です。主演のイライジャ・ウッドと誕生日が同じとはいえ、火山に身体ごと突っ込む勇気はないな～！とドキッとしましたが、ちゃんと迂回する道がありました。大きな石がごろごろある岩場をえっちらおっちら登っていくと、諏蛾守越、そして三俣山登山口に到着。急勾配、かつ泥で滑るので苦戦しましたが、見晴らしが良いので雲が流されていく合間から景色を楽しめました。360°見渡せる山頂というのは気持ちが良いですね。後から三俣山も実は火山だと知りました。

登り終えたら法華院温泉山荘を目指します。道中の北千里浜にはびっくりさせられました。四方を山に囲まれた中に砂利の平原が広がっているとは思っていませんでした。「少し歩くとゴリラに見える岩があるよ～！」と、I藤さんのテンションがぐんぐんUP。確かにどう見てもゴリラの横顔。山っているいろいろな楽しみ方がありますね。山荘に到着すると、I藤さんが昼食の準備に取りかかってくれ、あっという間に、特製大学芋と白玉入り



フルーツポンチができあがりました。食後にはコーヒーも頂き、もはや甘味処です。甘くて元気が出る上に、腹持ちも良いので自前のおにぎりの出番がない程、パワーを充電できました！話の流れで、今夜、坊ガツルにて宿泊するY口さんに、ツェルト設営講習会をして頂けることになり、坊ガツルキャンプ場へ。テントしか知らない私がツェルトを初めて見た感想は「こんな薄くてぺらぺらなんや…」です。この心許なさがカッコいい。Y口さんにデモンストレーションしてもらい設営方法を覚えたのでできればいつかは欲しいなと思います。ここでY口さんとはお別れ。私信ですが、3人での登山とても楽しかつ

たです。ここからはハローグッバイの丘、雨ヶ池越を経て長者原にたどり着くのですが、ゆるやかな登山道で初心者が気軽に登れそうな良いコースでした。I 藤さんに素敵な山を教えて頂き、感謝するばかりです。お二人ともありがとうございました。



【8月25～26日】(Y口)

さて、お二方と別れ、坊がつるに残った私は何をすることもなく、近辺の山に登るでもなく、ただその場で佇むだけだった。というか、何もする気が起きなかったのである。せつかく坊がつるまで来たのに何もしないなんてもったいないと思われる方もいらっしゃるかもしれない。しかし、何もしない時間、言い換えれば、何もする必要がない時間というのがあってもいいのではないだろうか。まあ考えてみれば、社会人なんて常に何をしなければいけない状況下にいるのが当たり前だから、自然とそんな時間を欲していたのかもしれない。

「(中略) 世の中という汽車が出発を延期してくれるわけではない。個々人の思いなどまとめて荷台に積みあげて、世の中は定刻通りに運転を続けて行く。のみならず、特急だの快速だのと、先を急ぐ列車ばかりがもてはやされて小さな駅舎はことごとく置いてけぼりをくらうのが、現代という鉄道だ。」ⁱ

ある小説の言葉が脳裏をよぎる。なるほど、のぞみやソニックばかりを利用してしまうのは、それだけ時間が惜しい=やらなければならないという気持ちに駆られているということか。

「かかる性急な時勢のうちにあっても、山中の秘境駅のごとく端然と座して、固有の時を刻んでいる」

ii

それでも、日常とは違う時間がここには流れている。坊がつるはまさに秘境駅だ。

そういえば、私の傍を通りかかった女性がやや奇矯な表情をしつつ、私とツェルトのコンビを写真に収めていた。ツェルト泊がそんなに珍しいのか、それとも、私の口元に食べかすでも付いていたのか。



ちなみに、この日の夕食は無洗米を炊いてレトルトカレーをかけただけのもの。アルファ米は先般の講習会で試してみたが、パサパサしてあまり好きになれなかった。そして、あろうことか、マグカップを忘れるという失態を犯すも、I藤さんが貸して下さってうまい緑茶を味わうことができた。I藤さん、ご高配にあずかり感謝申し上げます。



程なくして宵闇を迎えるが、ヘッドランプが要らないくらいに明るい。この日の月は満月だったからだ。おかげで星たちはすっかり追いやられてしまった。まあ、今宵ばかりは月明かりのもとで緑茶をたしなむのも悪くはない……としぼし満月を見やっているうちに、時刻は既に 23 時。いかん、明朝に間に合わんぞ。早よ寝んか！

翌日。この日は未明 4 時に出発し、久住山と中岳を登頂する予定であった……が、ツェルトから外を見やれば、既に日は昇っていた。下界ではこのことを寝坊と言うらしい。原因は間違いなく、昨夜私を魅了し続けた満月と快適さを極めたツェルトの仕上がり度だ。別に憎くも何とも思わないが。

ただ、さすがに時間の制約があるため、今回は久住山を省き、中岳へ向かって出発。9 時半過ぎに久住別れを通過したが、久住山方面は既に大勢の登山客で自然景観に似つかわしくない賑わいを見せていた。私はひたすら中岳へ歩を進めるが、こちらは至って閑静。九州最高峰というのだからもう少し混んでいると思っていたが。



何といても、中岳山頂からのこの眺めは他の峰に引けを取らぬ堂々たるものではないか。今までこの眺望を知らずに過ごしていたとは、なかなかもったいない日々を送ってきたものだ。だが、この素晴らしさを知ってしまったからには何度でも見たいと思うもの。今年はまだあと何回チャンスがあるだろうか。上司よ、私にもっと公休を与えてやってもいいのだぞ。

後記：この2日間で晴れ男の効力を使い切り、その後の富士山登頂でチェービーに圧倒されてしまったことは皆さまもご承知の通りかと。

i 夏川草介，2014，『神様のカルテ 3』，小学館文庫，p141

ii 同上、p142